

# 目次

スコットランドの歴史的重要地

10

スコットランド王家とイングランド王家の合体

11

スコットランド王

12

プロローグ スコットランドの魂

13

一風変わった宝物／「運命の石」という名の由来／旅をしてきた石／

イングランドが奪い取る／故郷スコットランドへ／現代になってなぜ返還？／

自治拡大から独立へ／役目を終えた歴史的遺物？／運命の石は英国史のカギ

## 第一章 伝説から辿る「運命の石」のはじまり

29

一、パレスチナからエジプトへ

文献に記された石／声高に歴史的正当性を語る理由／

「創世記」のヤコブの枕／舞台はエジプトへ／売られたヨセフ／

ヘブライ人、エジプトへ／モーセの時代に／ファラオの娘の名……／  
新天地へ出帆／伝説はご都合主義／モーセの許可？

二、スペインからアイルランド、そしてスコットランドへ

最初の地スペイン／さらなる新天地を探して／なかなか進まない移住／

三度目の正直／伝説のバージョン／スコウタは直接やってきた？／

イングランドの主張／スコットランドの主張／聖コルンバ／

アイオナ島にやってくる／あの怪獣の元祖／運命の石とダルリアダの王

## 第二章 スコットランドを作った国王たち

---

一、スコット人の到来からマクベスまで

多様でゆるいスコットランド／ピクト人／土台となった人々／ブリトン人／

アングロサクソン人／スコット人／キリスト教／ケルト系vs.カソリック／

アルバ王国の出現／ゲールの王位継承がもたらしたもの／

在位が長かったマルカム二世／問題ある王位継承／

マクベスの言い分／スクーンへ……

## 二、スコットランド王国出現前夜

カンモア王家の成立／マルカム三世の妃／マーガレット姉弟／

亡命地スコットランド／夫とともに宗教改革／ノルマン人の移住／

ローランドの発展／スコットランド一大事！／獅子心王のおかげ？／

二股貴族たち／マカルピン直系の最後の王／ノルウエーの乙女

## 第三章 独立戦争

### 一、運命の石、ロンドンへ

イングランド国王への使者／傑物エドワード一世／王を決めてほしい……／

司教の独断／大訴訟／バラバラなスコットランド／古き同盟／

イングランド軍の暴虐／奪われた運命の石／戴冠の椅子を作る

### 二、ウィリアム・ウォレス、起つ

一般民のウォレス／州長官を襲撃／モレーと合流／抵抗軍の主体は平民／

足場の悪い戦場／降伏勧告を一蹴／用いられなかった良策／

突撃のタイミンゲ／湿地に引き込まれた重装騎兵／完敗した正規軍／

サー・ウイリアム・ウォレス／怖気づくスコットランド貴族／英雄の最期

### 三、ロバート・ブルース、独立を奪還

七代目ロバート・ブルース／事前に知っていた？／十字軍に行った戦友同士／  
旗幟をくるくる変える／「かもしれない？」／破門される前に王になれ！／

蜘蛛に励まされる／ハイランド島嶼軍との絆／エドワード一世没す／

膨らむブルース軍／バノックバーン／一日目の戦い始まる／最低最悪の決定／

二日目に逃げたエドワード二世／スコットランド王国の誕生／

アーブロース宣言／返還されなかった運命の石

## 第四章 予言の成就、そして現代へ

### 一、果たされた運命の石の予言

赤ん坊の国王／激動の宗教改革期／メアリ、フランスへ／フランス王妃に／

新教国になっていた母国／夫ダーンリーの變死／追ひ詰められる女王／  
イングリランド王位請求権／エリザベス暗殺計画／ジエームズ一世誕生／  
永遠のメアリ

## 二、故郷への帰還

優しい警備員／人のいい警官／アベイに出たり入ったり／  
ハロツズの前で石を落とす／お咎めなし／戦後のナシヨナリズム／  
仕込まれたメッセージ／一世か、二世か／続いた奪還の試み／英国首相の声明

## エピローグ スコットランドよ、何処へ

どれだけの人が知っていた？／近代になってからの問題／  
簡単にはできない住民投票／スコットランド人の君主エリザベス二世／  
UKの王を捨てられるか／独立とは大変なこと／平和的なスコツツ／  
出て行った先の世界は……／運命の石は本物？ 偽物？／  
歩んできた歴史が大切

あとがき

247

参考文献

251

スコットランドの  
歴史的重要地



スコットランド

スコットランド王家とイングランド王家の合体

イングランド

スチュアート家

ジェームズ1世  
(1406-1437)

ジェームズ2世  
(1437-1460)

ジェームズ3世  
(1460-1488)

ジェームズ4世  
(1488-1513)

ジェームズ5世 (1513-1542)

メアリ・スチュアート  
(1542-1567)

マーガレット・  
テューダー

ヘンリー7世  
(1485-1509)

アーチボルド・  
ダグラス

ヘンリー8世  
(1509-1547)

マーガレット

メアリ1世  
(1553-1558)

エリザベス  
1世  
(1558-1603)

エドワード  
6世  
(1547-1553)

ダーンリー卿

テューダー家

ジェームズ6世 / 1世 (1603-1625)

チャールズ1世  
(1625-1649)

エリザベス = ライン宮中伯フレデリック

ソフィア = ハノーヴァー  
選帝侯  
エルンスト・  
アウグスト

チャールズ  
2世  
(1649-1685)

オレンジ公  
ウィリアム  
2世 = メアリ

アン = ジェームズ  
2世  
(1685-1689)

ジョージ1世 (ゲオルク)  
(1714-1727)

ハノーヴァー家

ウィリアム3世 = メアリ2世  
(1689-1702)

アン  
(1702-1714)

ジョージ2世 (1727-1760)

ジョージ3世 (1760-1820)

ウィリアム4世  
(1830-1837)

ヴィクトリア = エドワード

ジョージ4世 (1820-1830)

ヴィクトリア (1837-1901)

エドワード7世 (1901-1910)

サックス・コーバーク・  
ゴータ家

ジョージ5世 (1910-1936)

ウィンザー家と改称

エドワード8世 (1936)

ジョージ6世 (1936-1952)

エリザベス2世 (1952-)

## スコットランド王

\* ( ) は在位

### アルピン家

- |                        |                        |
|------------------------|------------------------|
| ① ケニス・マカルピン (843-859)  | ⑩ ダブ (962-967)         |
| ② ドナルド1世 (859-863)     | ⑪ カレン (967-971)        |
| ③ コンスタンティン1世 (863-877) | ⑫ ケニス2世 (971-995)      |
| ④ エイ (877-878)         | ⑬ コンスタンティン3世 (995-997) |
| ⑤ ヨーカ (878-889)        | ⑭ ケニス3世 (997-1005)     |
| ⑥ ドナルド2世 (889-900)     | ⑮ マルカム2世 (1005-1034)   |
| ⑦ コンスタンティン2世 (900-942) | ⑯ ダンカン1世 (1034-1040)   |
| ⑧ マルカム1世 (942-954)     | ⑰ マクベス (1040-1057)     |
| ⑨ インダルフ (954-962)      | ⑱ ルーラハ (1057-1058)     |

### カンモア家

- ⑲ マルカム3世  
(カンモア、1058-1093)
- ⑳ ドナルド3世 (1093-1094)
- ㉑ ダンカン2世 (1094)
- ㉒ ドナルド3世 (1094-1097)
- ㉓ エドガー (1097-1107)
- ㉔ アレグザンダー1世 (1107-1124)
- ㉕ デイヴィッド1世 (1124-1153)
- ㉖ マルカム4世 (1153-1165)
- ㉗ ウィリアム1世 (1165-1214)
- ㉘ アレグザンダー2世 (1214-1249)
- ㉙ アレグザンダー3世 (1249-1286)
- ㉚ マーガレット  
(ノルウェーの乙女、1286 - 1290)
- ㉛ ジョン・ベイリオル (1292-1296)

### ブルース家

- ㉜ ロバート1世 (1306-1329)
- ㉝ デイヴィッド2世 (1329-1371)

### スチュアート家

- ㉞ ロバート2世 (1371 - 1390)
- ㉟ ロバート3世 (1390-1406)
- ㊱ ジェイムズ1世 (1406-1437)
- ㊲ ジェイムズ2世 (1437-1460)
- ㊳ ジェイムズ3世 (1460-1488)
- ㊴ ジェイムズ4世 (1488-1513)
- ㊵ ジェイムズ5世 (1513-1542)
- ㊶ メアリ・スチュアート (1542-1567)
- ㊷ ジェイムズ6世  
(スコットランド王として1567-1625、同  
君連合の王ジェイムズ1世として1603-  
1625)

上記①～㉛までの王の中で、㉚マーガレット(ノルウェーの乙女)を除く30人の王がスクーン修道院の運命の石に座って、スコットランド王として戴冠した。  
また、㊷ジェイムズ6世はウェストミンスター・アベイの運命の石が収められた戴冠の椅子に座って、イングランドとスコットランド同君連合の王ジェイムズ1世として戴冠した。  
以降、現エリザベス2世女王まで全ての王はウェストミンスター・アベイの戴冠の椅子に座って戴冠の儀式を執りおこなっている。

## プロローグ スコットランドの魂

### 一風変わった宝物

スコットランドの首都エディンバラ。世界遺産になっているこの美しく荘厳な歴史都市の顔ともいえるのがエディンバラ城です。その城内の宮殿二階には、スコットランドの宝器を収めたクラウンルームと呼ばれる部屋があります。ここにはスコットランド王国の王冠、御剣、王<sup>おう</sup>笏<sup>しやく</sup>といった、まばゆいばかりの由緒ある素晴らしい品々が展示されています。

そんなクラウンルームに一風変わった、ある「宝」が置かれています。それは、重さ一五二キログラム、サイズは六七〇×四二〇×二六五ミリメートル、ダイヤモンドもエメラルドも、金や銀も装飾されていない、ほぼ直方体の、なんの変哲もない、どこにでもあるようなふつうの石。これが「運命の石」(Stone of Destiny)と呼ばれるものです。

——ただの石がスコットランドの宝物を収めた部屋にあるなんて、どういうこと？——

そう思う人がいても全く不思議はないでしょう。しかし、一見とても宝とは思えないものがここにあるのには理由があります。なぜなら、運命の石は王冠、御剣、王笏とはそもそも質的に全く違った、至宝などというありきたりの言葉の範疇をはるかに超えた、スコットランドの魂というべき大切な存在だからです。

運命の石とは、いったいなんなのでしょう。

### 「運命の石」という名の由来

ブリテン島北部地域がスコットランドと呼ばれるようになるはるか前から、この地域の代々の王たちは、この運命の石に座ることによって神聖な戴冠の儀式を執りおこなってきました。古き言い伝えによれば、王にふさわしい正しい血統の者が座ると石は声を出して呻き、王位を篡奪しようとたくらむ邪な心を持った者が座ると、石は沈黙を守ったということです。つまり、王位を望む者は、そういう神秘的な力をもつとされ、それゆえ畏敬されてきたこの石の審判を経て初めて、人々に祝福された王となることができましたのです。

この石はなにゆえ運命の石と呼ばれてきたのでしょうか。大事な点です。右に述べた王を審

判するという意味だけでも王位を望む者の運命を左右するわけで、十分運命の石と呼ばれてもいい気がします。が、そう呼ばれるもつと直接的な理由があります。

一四世紀の終わり、スコットランド北東部アバディーンの修道士ジョン・フォーダンが *Chronicle of the Scottish Nation* (『スコットランドの年代記』) という書物を著しました。そのなかに、この石にまつわる昔からの、次の有名な予言が記載されています。

“Unless the fates are false, the Scots will reign. Where'er the fatal stone they find again.”

——運命が欺かない限り、この石のあるところ、われらスコット人が統治する。——

(『スコットランドの年代記』第一卷二七章 筆者訳)

かつて運命の石にはこの予言を刻んだ金属プレートがつけられていたともいわれており、フォーダンの本に表された「運命」という言葉を含んだなかなかドラマチックな文言が、その後のスコットランドの年代記モノや著作物等に引用され、「運命の石」という呼び名が定着していったようです。

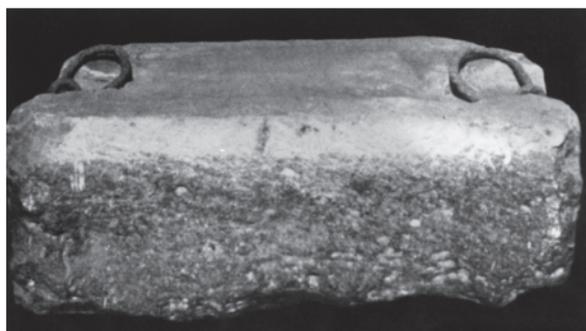
なお、長い時間が過ぎたあと、この予言が劇的に輝く日がやってきますが、それはまた本文でのお楽しみということにして、こんなミステリアスな運命の石は、古いにしえからずっとブリテン島北部地域にあったものではなく、外から持ちこまれたものであると伝わっています。

### 旅をしてきた石

そもそも運命の石は、『旧約聖書』「創世記」に登場するヘブライ人の族長ヤコブが枕にした石であるという、古くからの言い伝えがあります。ヤコブはハランに向かう途中、ベテル（現在のエルサレムの北にある町）というところまで来たとき、日がくれたので、そこにあつた石を枕にして眠りました。すると夢のなかに神が立ち、その言葉を聞いたヤコブは以降、神にしたがい生きることが誓います。つまり枕にした石は神を現出させた神聖なものでした。

その後、この運命の石は諸々の理由でパレスチナからエジプト、スペインを経て、アイルランドの伝説的聖地であるタラの丘に置かれました。石は旅をしてきたというわけです。そして六世紀、アイルランド人（スコット人）のキリスト教高位修道士とともに、ブリテン島北部地域のアイオナ島にもたらされました。

と、ここまででは信じるも信じないも自由の説話・伝説の領域です。しかし、九世紀のなかご



運命の石 (写真：PA Images / Alamy Stock Photo)

ろ、ブリテン島北西部のスコット人のダルリアダ王国と北東部のピクト人の王国が統合され、スコットランド王国の原型であるアルバ王国が誕生すると、石はこの新王国の首都であるストーンに移されます。運命の石がストーン・オブ・スクーン (Stone of Scone) と呼ばれるのは

そのためですが、<sup>\*</sup>もうこのあたりは伝説ではなく、歴史の世界です。

以来、スクーンで最初に運命の石に座ったケニス・マカルピンから、一三世紀末のジョン・ベイリオルまで、三人のスコットランドの王のうち、ほとんどの王がこの石に座りました (二二ページ表参照)。シェイクスピアで有名なマクベスも座りました。もつとも、あの史劇で描かれたマクベスは、シェイクスピアの創作ですが。ともあれ、いつしか運命の石は歴史に存在する、スコットランドの象徴、魂となっていたのです。

イングランドが奪い取る

ところが一二九六年、大変なことが起こります。とんでもな

い剛の男が、スコットランド人がこれまで対したこともない強力な騎兵を中核とした大軍を率いて南から侵攻してきました。イングランド国王エドワード一世です。

東ローマ皇帝ユスティニアヌスにもたとえられた卓越した行政官であると同時に、天才的な軍事指揮官であったこのイングランド国王は、それまでイングランドに押されながらも独立はなんとか保っていたスコットランドを蹂躪じゆうりんしました。その結果、スコットランドはとうとう独立を失いました。そして、スコットランドのシンボルである運命の石は、征服の証あかしとしてエドワード一世にスクーンからロンドンへと持ち去られてしまったのです。

が、世の中、先はまったくわからないもの。だからこそ歴史は面白いというかスリリングというか。スコットランドがそれでもついていたのは、こんな歴代最強最優秀との評価があるイングランド国王エドワード一世の跡取り息子で次代の王エドワード二世となる男が、父とはまったく真逆の、英国史一、二を争う愚王でした。加えて当の勇猛王エドワード一世は、スコットランドを征服したころは人生の終盤に差しかかっており、病もかかえていました。

ほどなくスコットランドで反イングランド勢力が盛り返し、エドワード一世は再び遠征に赴くものの、途上の陣中で没します。その直前、老王は死の床に息子を呼び、自分が死んだらこの身を大釜かまで茹ゆで、皮や肉をすべて剥ぎ骸骨にして袋に入れ、スコットランド人との戦場にい

つも持ち運べ、そうすればスコットランド人はおそれをなしてわが軍は常に勝つと、鬼神のごとき遺言を残したそうです。あの五丈原ごじょうげんの戦いで、自分そっくりの人形を作り軍の先頭に立てよと言ひ残して病没したと伝わる諸葛孔明しよかつこうめいをも凌しのぐような猛将ぶりです。

しかしそんな父親の凄まじい遺言をも聞かず戦いがいやで仕方がないエドワード二世は、父が死ぬとさっさと撤退命令を發し、軍をロンドンへ引き上げました。ためにイングランドはスコットランドを服従させる勝機を永遠に失いました。

エドワード一世亡きあとのイングランド国王がこんな人物だった幸運もあり、ロバート・ブルース（ロバート一世）率いるスコットランドの人々は、この「スコットランド独立戦争」と呼ばれるスコットランド史上最大の危機を戦い抜き、勝利し、独立を再び取り戻すことができました。

けれどもブルースたちは、いったん奪われた運命の石を取り戻すことはできなかつたのです。そのままずっと、運命の石は「敵地」ロンドンのウェストミンスター・アベイ（寺院）に置かれたままでした。

## 故郷スコットランドへ

それから長い時間が、本当に長い時間が経った一九九六年七月四日。イギリスの新聞「ザ・タイムズ」の一面に、ある記事のヘッドラインがドンと出現しました。

“Stone of Scone goes home to Scotland after 700 years”

——ストーン・オブ・スクーン、七〇〇年のときを経て故郷スコットランドへ——

そう、この記事が載る前日の七月三日。当時のジョン・メイジャー英国首相は運命の石をスコットランドに返すことを英国議会で表明しました。エドワード一世がスコットランドから強奪して七〇〇年後のことです。

私事ですが、筆者はこのときUCL（ユニバシティ・カレッジ・ロンドン＝ロンドン大学）の史学科大学院に留学中で、「インディペンデント」紙より値段が多少安く、内容も同紙と比べ大衆寄りの「タイムズ」紙はちよくちよく買っていました。その日も大学へ行く途中で求めた「タイムズ」紙を見、突然七〇〇年を飛び超えて目前に現れた運命の石という歴史に、時空感

が麻痺まひするような興奮を覚えました。

それから四カ月ほど後の一九九六年十一月五日。筆者はそのころ住んでいたロンドン北部フィンチリー・セントラルの自宅フラットで、じっとBBCのテレビ中継を見ていました。一台の車がイングランドを北上し、スコットランドを目指しています。その車を、テレビカメラを搭載したヘリコプターが上空から追いつき、刻々と映像を生で送っています。運命の石を運ぶ車でした。

やがて車は、イングランドとスコットランドの境界を、いえ、両地域の歴史的経緯を考えれば国境と言ってもいいエリアを流れるツイード川に至ります。そしてそこに架かる橋のなかほどこで簡単な引き渡し式を終えると、車は再び動き出しスコットランド側の「国境の町」コールドストリームに入りました。すると、どうでしょう。人々が次から次へと道路沿いに出てきて、ある人々は車と並走しながら、またある人は手を振って、エディンバラへと向かう車を見送っています。

驚くべき光景でした。イングランドを北上しているときは沿道に出て車を見る人をテレビで確認できなかったのに、スコットランドに入った途端、こうなのです。その後もずっとスコットランド内を進む車の様子をテレビで見えていましたが、沿道で迎える人たちの姿が途絶えるこ

とはありませんでした。スコットランドの人々がいなく運命の石への思いを、このとき、垣間<sup>かひま</sup>見た気がしました。

冒頭で述べた、いまエディンバラ城のクラウンルームに展示されている運命の石は、こういう経緯で故郷に戻ってきたものだったのです。それにしてもなぜ、現代になって運命の石がスコットランドに返されたのでしょうか。単なる英国政府の思いつきで、突然返還することになったのではないはずです。必ず理由があります。

現代になつてなぜ返還？

今日、スコットランドには独自の議会と政府があります。国(UK = United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland)が権限を留保する憲法事項、防衛、外交、エネルギーなどの分野をのぞき、スコットランド議会には保健衛生、教育、運輸、経済開発、投資、観光など多彩な分野に関する第一次立法権が付与され、スコットランド政府がこれらを担えるようになっていきます。一九九七年にトニー・ブレア労働党政権が誕生して、スコットランドを筆頭にウェールズ、北アイルランドといったUKを構成する各地域の地域分権拡大が進みました。

こうした地域分権拡大に至った背景には第二次世界大戦後、とくにスコットランドにおいて

は一九七〇年代以降、自治権要求、議会設置要求の一層の高まりがありました。とりわけ北海油田の開発の進捗で経済的自立にも自信を持つてきたスコットランドは、自治権獲得要求もさることながら、さらに先鋭な自立要求、すなわちUKから離脱して独立を目指す声徐徐に膨らみつつありました。

そんな流れのなかでの運命の石返還決定だったのです。これが英国中央政府の、スコットランドの人々をなだめる政策の一つ、つまり「アメ」だったと見ても、あながちはずれということはないでしょう。「運命の石を返すから、あまりわがままをいわないで」とでもいうか。七〇〇年経って担ぎ出された運命の石は、だから歴史的遺物 (heritage) であると言いきってしまえるような、役目をとうに終えたものではない、ということなのです。

### 自治拡大から独立へ

そのスコットランドの動きは、運命の石が戻ってきてからも、ますます加速しています。いや、むしろ戻ってきたあたりから、さらにスコットランド・ナショナルリズムに火がついた観があります。

二〇一四年九月一八日には、スコットランド全域でUK離脱を問う住民投票が行われました。

こういう法的な拘束力がある、大切な事柄を問う住民投票は英国首相の承諾、すなわち英国中央政府の同意がないと実施できません。中央政府には住民投票を止めるための奥の手があるのです。

しかしこのとき、デイヴィッド・キャメロン首相は、事前の世論調査で独立反対派が多数を取るという確証があったので、よし、と住民投票にゴーサインを出しました。が、ふたを開けてみれば、大接戦。辛うじてスコットランドの独立は否決されましたが、キャメロン首相は冷や汗ものでした。

そして二〇二一年五月六日。この日投票が行われたスコットランド議会の選挙で、二〇二〇年に亡くなった名優ジョン・コネリーもメンバーだったSNP (Scottish National Party) スコットランド国民党) を主体とする独立賛成派は、とうとう議会の過半数を制しました。少なくともスコットランドの人々は、彼らの議会選挙を見る限り、独立の選択をしました。UK離脱への動きは新ステージに入ったのです。

スコットランドではこれに勢いを得て、再度の住民投票を求める気運が高まっています。中央政府は前回肝を冷やしましたから、こんな状態になっては、もちろん簡単にOKを出すはずがありません。国防の要である英国唯一の戦略核ミサイルを搭載した原子力潜水艦の基地をも

つスコットランドに出て行かれては、英国はとんでもないことになります。

### 役目を終えた歴史的遺物？

けれども他方で、英国（UK）自体はEU離脱を決めています。イングランドとの抗争の歴史から敵の敵は味方と、スコットランドはイングランドの天敵フランスと古くより同盟を結び、共同でこの敵と戦ってきました。スコットランドは伝統的に親フランスであり、英国のEU離脱には一貫して反対してきました。

もし仮に再び住民投票が行われれば、今度こそ独立派が勝つのでしょうか。いや、前回がそうだったように、住民投票はスコットランド議会の選挙とはまた別物です。独立の是非は人々が本気になって、熟慮に熟慮を重ねることでしょう。UKから離脱するということは、未来が本当にどうなっていくかわからない、保証もない、スコットランドにとっても大変な選択になるはずですよ。

それでも、もしもスコットランドが独立してしまった場合、運命の石はどうなるのでしょうか。かつてエドワード一世はこの石をロンドンに持ち帰ると、それが座板の下に収まる特別の戴冠の椅子というものを職人に作らせました。以来、歴代のイングランド国王はこの戴冠の椅子に

座って、つまり椅子の座板を間にじかではないけれども、一応運命の石に座るといふ形になって、ウエストミンスター・アベイで戴冠式を挙行してきました。現エリザベス二世女王もこの椅子に座って戴冠しており、その際の写真もしっかり残っています。

そんな歴史的経緯もあり、英国中央政府は運命の石を返すとき、スコットランド側にある申し入れをしました。次の英国君主が戴冠するとき、石を一時的に貸してほしいと。これまでの伝統に則<sup>のつと</sup>って石をまた戴冠の椅子に収めて、新国王の戴冠式を挙行したいと。

もしもこのときスコットランドがUKを離脱<sup>もんちやく</sup>して独立国になったら、「外国」の英国に運命の石をすんなり貸してくれるでしょうか。なにか、ひと悶着<sup>もんちやく</sup>起きそうです。いや、独立しておらず現状と変わりなくとも、スコットランドが素直に運命の石を新君主の戴冠式に、一時的に貸すことを承知するでしょうか。

再度言いますが運命の石をめぐる問題は、決して終わってはいません。この石は、過去からの、そしてこれからもスコットランドとイングランドの関係の、大きなカギとなるのは確かでしょう。

## 運命の石は英国史のカギ

本書はこのような、わが国ではあまり知られていない運命の石について語っていくものです。まず運命の石がどういう由来を持ったものであるのかを記していきます。それが歴史的には確認しようがなく、常識的には史実とはとても言いがたいものでも、この石にまつわる言い伝えは、迷うことなく紹介していくつもりです。なぜならそうした伝説や説話の類いは、スコットランドの人々の豊かな創造力が産み出した文化遺産だからです。

そのうえで、ピクト人、スコット人と称されるケルトのゲール人、ゲール人とはまた違うケルトのブリトン人、アングロサクソン人、ヴァイキング、そしてノルマン人と、多彩な人々によって構成されたスコットランド王国が出現してくるまでの実際の歴史を見ていくことにします。豊かな伝説に包まれた運命の石を擁するスコットランドが、現実にはどんな道を辿<sup>たど</sup>ってきたのか。正しい流れを押さえておくことは大切です。

そう歴史を押さえてから、前述の一三世紀末から一四世紀はじめにかけてのスコットランド独立戦争を本書の柱の一つとして追ってみます。イングランドによる運命の石の強奪が間違いなくそのはじまりの一つの要因でもあるスコットランド独立戦争は、それまでイングランド側についたりスコットランド側についたり、とかく勢いと利のあるほうに走りがちだったスコットランド貴族たちを団結させました。今日的なスコットランド人意識は、この戦いを通じて形

成されたのです。

もちろん近代から現代にかけての、運命の石にまつわる動きも見逃せません。石の奪還を叫ぶスコットランド愛国者たちはなにやら行動を開始します……。

なんの変哲もないただの赤色砂岩。しかし、この運命の石をめぐるドラマは、イングランドとスコットランドのせめぎ合いを大きく巻き込んで展開された、ちよつと違ったアングルから眺める、しかし紛れもない英国史です。それでは、本書をお楽しみください。

## 註

\*1 スクーン (Scoun) はスコーンとも発音されます。筆者がかつてロンドンで耳にしたときは、地名をいう場合はスクーンが、運命の石をいう場合はストーン・オブ・スコーンと言っている人が少なくない気がしました。なお諸説ありますが、よくアフタヌーンティーで出てくるイギリスの代表的菓子のスクーンは、ストーン・オブ・スコーンに名も形も由来するといわれています。